

スポーツ振興等調査特別委員会会議記録

スポーツ振興等調査特別委員長 城内 愛彦

- 1 日時
平成 26 年 1 月 16 日（木曜日）
午前 10 時 3 分開会、午前 11 時 44 分散会
- 2 場所
第 4 委員会室
- 3 出席委員
城内愛彦委員長、佐々木朋和副委員長、樋下正信委員、岩崎友一委員、佐々木博委員、飯澤匡委員、大宮惇幸委員、名須川晋委員、小野寺好委員、吉田敬子委員
- 4 欠席委員
伊藤勢至委員
- 5 事務局職員
本多担当書記、伊藤担当書記
- 6 説明のため出席した者
岩手県教育委員会事務局 スポーツ健康課 主査 三ヶ田 礼一氏
- 7 一般傍聴者
なし
- 8 会議に付した事件
 - (1) 調査
「岩手から世界へ！～トップアスリーの育成環境～」
 - (2) その他
次回の委員会運営について
- 9 議事の内容

○城内愛彦委員長 おはようございます。ただいまからスポーツ振興等調査特別委員会を開会いたします。

まずもって、あけましておめでとうございます。昨年末は弾丸ツアーでの視察、大変御苦労さまでございました。引き続きの勉強会ということで、よろしく申し上げます。

これより本日の会議を開きます。

本日は、お手元に配付しております日程のとおり、トップアスリーの育成環境を中心とした本県のスポーツ振興の現状などについて調査を行いたいと思います。

本日は、講師としてアルベールビルオリンピックノルディック複合団体戦金メダリストで、現在、教育委員会事務局スポーツ健康課主査の三ヶ田礼一氏をお招きしておりますので、御紹介いたします。

○三ヶ田礼一講師 皆さん、おはようございます。三ヶ田礼一と申します。きょうはどうぞよろしくお願ひします。

○城内愛彦委員長 三ヶ田様の御略歴については、お手元に配付している資料のとおりでございます。

本日は、三ヶ田様から、岩手から世界へ、トップアスリートの育成環境と題しまして、トップアスリートの育成を中心としました本県のスポーツ振興の現状などに関するお話をしていただくことになっております。三ヶ田様におかれましては、御多忙のところ御講演をお引き受けいただきまして、改めて感謝を申し上げます。

これから講師にお話をさせていただきますが、後ほど三ヶ田様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願ひたいと思ひます。

それでは、三ヶ田様、よろしくお願ひします。

○三ヶ田礼一講師 改めまして、皆さんおはようございます。御紹介いただきました三ヶ田礼一と申します。今回はこのような場でお話をさせていただくチャンスをしていただきまして、本当にありがとうございます。

きょうは、こちらにありますけれども、岩手から世界へ、トップアスリートの育成環境ということでお話をさせていただきたいと思ひます。いろいろな事例などを交えながらお話をさせていただきたいと思っております。岩手県がもしこうだったらどうだろうなどお考えいただきながら、お聞きいただければと思っております。

きょうは、もう少し小ぢんまりとしたところで、もっと人数も少ない場でお話するのではないかと思ひながら来たのですけれども、来てみましたらカメラも来ておまして、オリンピックの試合よりも緊張しております。リラックスしながらお話をさせていただきたいかなど。頑張りたいと思ひますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

ぜひ、皆さんにクイズとかも出しながら、ちょっと参加していただきながらお話を進めさせていただきたいと思ひます。座っていますと逆に緊張しますので、立ってお話させていただきたいと思ひます。

それでは、お話に入らせていただきます。まず初めにクイズ、オリンピック選手ということで進めさせていただきます。トップアスリートの育成や強化につきまして、国が責任を持つということがスポーツ基本法ではうたわれております。

さて、岩手県では、スポーツ選手の強化ということで、どういう取り組みになっていますでしょうか。まず、トップアスリートのクイズを出したいと思ひます。写真が出てきますので、お名前と、あとは競技名がわかりましたらすぐに言っていただければと思ひます。

それでは、いきたいと思ひます。まず、1人目になります。

〔「吉田さん」と呼ぶ者あり〕

○三ヶ田礼一講師 そうですね。女子レスリングの吉田沙保里選手でございます。

では、次にいきたいと思ひます。

〔「室伏広治」と呼ぶ者あり〕

- 三ヶ田礼一講師 はい、ハンマー投げの選手です。
次にいきたいと思います。
〔「体操の」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 体操の内村航平選手ですね。
では、次にいきたいと思います。
〔「水泳、北島康介」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 水泳の北島康介選手。
では、次にいきたいと思います。
〔「フェンシングだっけ、先生だっけ」と呼ぶ者あり〕
〔「太田だったかな」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 フェンシングの太田雄貴選手ですね。
次にいきたいと思います。
〔「卓球、愛ちゃん」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 すぐわかりますね、福原愛選手。
次にいきたいと思います。
〔「バレー、女子バレー」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 はい、そうですね。
〔「木村沙織だな」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 はい、木村沙織選手です。
次にいきたいと思います。
〔「なでしこ。サッカーか」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 岩手県にゆかりのある、岩清水梓選手です。
ほとんどの方が一目見たときに、何の競技で、名前も出てくるような選手、本当に有名人のような選手になっております。
それでは、次にいきたいと思いますが、こちらおわかりですか。カーリングです。
〔「苫米地選手」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 はい、苫米地美智子選手。どの方かおわかりですか。
〔「真ん中」と呼ぶ者あり〕
〔「左っぽいですね、髪型が」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 皆さんから見られて、そうですね、左側の方が苫米地選手になります。
これが苫米地選手の成績になります。
ちょっと見づらいと思うのですが、引き続きましてこちらになります。
〔「ジャンプかな」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 おわかりですか。きのうの新聞で大きく発表になりました。
〔「永井選手」と呼ぶ者あり〕
- 三ヶ田礼一講師 永井秀昭選手です。どの人かおわかりですか。皆さんから見て一番左

の選手が永井選手になります。

永井選手の成績ですけれども、ちょっと見づらいのですが、これは国内での今までの主な成績ですが、ほとんど優勝という文字がついています。ここ二、三年で、世界で活躍するようになり、世界での成績がアップして、昨年の世界選手権個人戦で5位に入る力を持っている選手になります。

もう来月にはソチオリンピックが始まりまして、2人とも岩手県の代表として参加するのですが、どうでしょうか、先ほどの全国で活躍している、誰でもわかるような有名な選手たちから比べますと、まだちょっと皆さんも、あれ、どの人かなというようなイメージではないかなと思います。全国の誰が見ても、ああ、永井選手だなとわかるような選手を、岩手県からぜひ育てたいと考えております。

次へいきたいと思います。今見ていただきました選手の出身地や学歴、所属先などになっております。それぞれ全国各地の出身で、学歴はほとんどが大学です。高校卒業の方もいるのですが、注目していただきたいのは所属先です。こういうところに所属して、彼ら、彼女たちは世界で活躍をしているということです。

岩手県の、さっき出ました2人ですけれども、苫米地選手はオリンピックに出たいということで北海道銀行に単身赴任していきまして、オリンピックの切符をつかんでいます。あと、永井選手ですけれども、大学を卒業してから一旦岩手県に戻ってきたのですが、なかなかスキーを続ける環境がなくて、きのうの新聞で読まれた方もいらっしやると思いますけれども、1年間ぐらいアルバイトをして、それで何とかスキーのトレーニングとかも続けていたのですが、なかなかそれが厳しくて、そのときにちょうど岐阜県で国体が開催されるということで選手を集めていて、そこで声がかかり、岐阜県に行ってスキーを続けているという形です。何年か前の岐阜国体では、岐阜県の選手として参加して優勝しておりました。岩手県でこういうトップアスリートを育てることができる企業というのはどうでしょうか、考えられるでしょうか。

さて、続きまして次に入りたいと思います。ここではスポーツの魅力、力についてということでお話をさせていただきたいと思っております。東京オリンピック、パラリンピックの開催が決定いたしました。1回目は残念ながら招致に失敗し、2回目で開催地に決定しましたが、なぜあれだけ東京都や国が招致に力を入れてきたか。ここに書いてありますとおり、オリンピック、パラリンピック招致の理由として、スポーツには夢、感動、希望、活力などを見ている人たちに与えるということがありますし、やる、見る、支えるというふうに、やっている人だけではなく全ての人が参加できるものがスポーツではないかなと思っております。あと、これは東京オリンピック招致のポスターに書いてあるものですが、今、ニッポンにはこの夢の力が必要だ、スポーツの力が必要だと書かれておりました。

そして、ここに書いてありますとおり、沖縄県ですとかほかの県でも、スポーツ観光に本格的に取り組んでいる。専属の職員を配置しまして、積極的にスポーツのイベントです

とか、そういうものの招致に取り組んでいる。それは、やはりスポーツには後ろについてくる莫大な魅力があるためと言われております。

続きまして、ここでは国力イコールスポーツ力ということで、ちょっとお話をしたいと思うのですが、スポーツ界では国力イコールスポーツ力と言われておまして、それはどういうことかといいますと、こちらに表がありますが、まず向かって左側がGDP、国内総生産の順位になっております。ちょっと昔になりますけれども、2008年の順位になっております。その次ですけれども、世界のスポーツ強豪国の順位になっております。これは、ドイツのスポーツビルド誌という雑誌なのですが、その雑誌が85種目のオリンピック競技と、あとはオリンピック以外の10競技のプロスポーツなどを含めて、競技対象にしまして、強豪国のランキングづけをしておりました。一番右端がロンドンオリンピックの国別メダル獲得数になっております。

国内総生産から見ていただきたいと思うのですが、上位に黄色い色を入れております。赤が日本になっております。大体、国内総生産が上のほうの国は、スポーツでも上位に上げられているのを見ておわかりになると思いますが、日本は、国内総生産は上のほうですけれども、スポーツの順位で見ますと下のほうになってしまうということになります。

日本はスポーツ力が低いから、世界の中で発言力、国の力が低いのではないかとスポーツ界では言われております。さて、これは世界の中での日本の順位になっておりますけれども、こういうことで考えていきますと、岩手県はどうでしょうか。インターネットで調べますと、世界の順位の下に日本の都道府県別の順位というのも出ておりますので、そちらのほうもぜひ皆さん御確認をしていただければと思っております。

ということで、続きましてこちらは皆さんも御承知のとおり、国民体育大会の過去の成績になっております。こちらは2008年の大分国体からの成績になっております。今年度ですけれども、昨年秋に行われました東京国体までの成績になっております。皆さんも御存じのとおり、必ず開催県が総合優勝しています。一番端の括弧の中に書いてあるのが岩手県のその年の目標になります。その目標に対して順位がどういうふうになっているかを示しております。

約2年後に岩手県で国体が開催されますけれども、そのときの目標というのは、今現在は8位以内ということで言われております。震災の影響もありまして、いろいろ強化も厳しいという中、また財政面でも厳しいという中で、選手の皆さん、競技団体の皆さんは頑張っているところではあるのですが、何となくこういうのを見ますと、私はスポーツの世界で生きてきた人間ですので、ずっと過去開催県が優勝している中で、8位以内でよいのかなという気持ちにはちょっとなってしまいます。これが過去の成績になっております。

ここからちょっと済みません、私の自己紹介を簡単にさせていただきたいと思っております。私は岩手県の県北にあります旧安代町の田山というところで生まれ育ちました。スキーは

3歳のときに初めて履かされました。これがその証拠写真になっております。3歳のときに初めてスキーを履いて写真を撮られたところです。ちょっと遠くて見えづらいと思いますが、今のような立派なスキー道具ではなくて、近くに来るとストックに節目が見えるのですが、竹ストックでした。竹のストックで、スキーは木でできたスキーです。スキー靴は革でできていたものでした。ひもで縛るスキー靴です。アルペンの道具ですが、こういうもので父親に、スキー場ではなく裏山に連れて行ってもらいまして、初めてスキーを履かされたと言われておりました。

そういうスキーのできる環境で育ちましたので、小さいころから冬になりますとスキーで一生懸命遊んでいた少年だったそうです。当時はテレビゲームなどなく、冬に一番楽しい遊びがスキーでしたので、一生懸命スキーで遊んでおりました。

地元の田山小学校に入学しまして、田山小学校では4年生からスキースポーツ少年団に入ることができることになっていました。私は小さいころからスキーが大好きで得意でしたから、4年生のときに入りました。スキースポーツ少年団でしたけれども、年間活動しておりまして、夏は体力づくりをしていました。スキーのために夏にやる体力づくりでサッカーをやったり、水泳をやったり、陸上をやったり、いろんなスポーツをやらされながら体力づくりをしていました。

そして、スキースポーツ少年団で活動はそういう感じでやっていたのですが、うちに帰りますとうちにも少し怖い指導者がおりました。父親がスキースポーツ少年団の指導者をしておりまして、夏ですと毎朝6時に起こされまして、学校に行く前に2キロメートルを走らされておりました。ただ行ってきなさいというのではなくて、毎日、父親がスタートのときにストップウォッチを持ってきてまして、きょうは10分を切るように、用意スタートというように走らされておりました。当時は2キロメートルを10分前後で走っていたのですが、余り速いほうではなかったと思うのですが、10分を切るようにと言われて走らされたので、10分を切らないと怒られるかなと思いながら毎日走った思い出があります。父親からその当時言われていた言葉が、人と同じ練習をしていたのでは人には勝てない、人に勝ちたいのだったら人がやっていないときでも、隠れてでも、人よりも一生懸命やらないと人には勝てないのだよ、とよく言われておりました。

そして、小学校5年生のときですが、資料に笠谷幸生さんと出会うとあるのですが、御存じの方もいらっしゃると思うのですが、笠谷幸生さんは1972年に札幌市で冬季オリンピックがあったときにジャンプ競技で優勝した方なのです。この方が、私が小学校5年生のときに岩手県にお話をしに来てくれまして、田山のスキースポーツ少年団も笠谷さんの講演を聞きに、盛岡市だったと思うのですが、バスでできて、お話を聞きました。

内容はちょっと何を話されたか忘れちゃったけれども、笠谷さんのお話を聞いて感動しましたし、あとは笠谷さんから個人的にちょっと声をかけてもらいました。岩手県内からたくさんの方のスポーツをやっている小学生から大学生、社会人まで、いろんな選手が笠谷さん

の講演を聞きに集まったのですが、その中で個人的に憧れのオリンピックの金メダリストから声をかけてもらいまして、体を動かすプログラムがあったのですけれども、体を動かしている途中で笠谷さん本人から指をさされまして、おい坊主、おまえは随分身が軽いな、と声をかけてもらいました。憧れの方から声をかけてもらいましたので、すごくうれしかったという思い出があります。

笠谷さんの講演会が終わって、バスでまた田山まで帰ったのですけれども、その途中で笠谷さんのかけてくれた言葉を頭の中で何回も繰り返しながら、どういう意味で笠谷さんは声をかけてくれたのかなと考えて帰りました。身が軽いなという言葉は、もしかすれば褒めてくれたのではないかなとか、金メダリストから褒められたということは、これは自分も少し頑張って練習を一生懸命やっていけば、笠谷さんみたいにスキーがうまくなって、オリンピック選手になれるのではないかなと。当時は大きな勘違いだったかもしれませんが、それであればあしたから練習を一生懸命頑張って、オリンピック選手になろうと思いました。それが、私がオリンピックというものを意識し出したきっかけでした。今考えますと、笠谷さんから声をかけてもらわなければ、今こうやって皆さんの前でお話するチャンスというのなかったのではないかなとっております。そういう出会いが小学校5年生のときにありました。

その後、小学校を卒業しまして、田山中学校では夏は野球部に所属しておりました。学校が小さくて人数が少なかったので、夏冬かけ持ちで、夏は野球部、冬はスキー部に入っておりました。人数が少ないので、3年生になりますとほとんどが野球部のレギュラーになれるのですけれども、私は3年生になってもレギュラーになれず、3年間補欠の生活をしておりました。でも、ふてくされずに、自分の専門は冬のスキーだと。強がりになってしまうかもしれませんが、冬のための体力づくりだと思いながら、夏も一生懸命野球部の部活動に取り組みました。中学校の3年間、田山中学校で夏冬、野球部とスキー部で頑張りました。

その後、青森県の東奥義塾高等学校に進学しました。そこでは3年間スキーに熱中して、スキー専門でやりまして、高校2年生のときにインターハイで優勝することができました。

そして、その後明治大学に入りまして、4年間スキーを一生懸命頑張りました。平成元年に、現在はもう変わっていますが、当時は安比高原スキー場を株式会社リクルートが経営しており、リクルートのスキーチームというものがあまして、そちらに入社させていただきまして、5年間スキーをやらせていただきました。5年間のうち入社して3年後にオリンピックに出場することができまして、金メダルをとることができました。

その後、平成19年に岩手県に採用していただきまして、今現在に至っております。今は地元、大宮中学校のPTA副会長をさせていただいております。

ちょっと自己紹介を長くさせていただいたのですが、それはこちらでちょっとお話をしたいと思っております。私は偶然にも、先ほど紹介させていただきましたスキーのできる環境で生まれ育ちました。そして、笠谷さんですとか、あとはスキーを指導していただく

先生方、指導者の方とのいい出会いがありました。そして、先ほど小学校からお話しましたが、指導方法として、小学校のときにはスキー専門ではなくていろんなスポーツをやりながら体力づくり、土台づくりをさせていただきまして、中学校になりましたら少し絞ってスキーと野球を、高校に入ったらスキー一本で専門にというふうに、最初は土台づくりから入って行って、だんだんと絞って行ってというような指導方法で育てていただきました。

私の場合は、偶然にもそういう流れで育てていただいたわけですが、これを偶然ではなくて、必然的に子供たちに与えていくことによって、オリンピック選手、トップアスリートが育ちやすくなると言われております。ということで、先ほどのような偶然を待っているのではなくて、必然的にトップアスリートを育てようということで、今現在、世界各国、また日本の各地で取り組まれている、事業を御紹介したいと思うのですけれども、タレント発掘事業という事業になっております。

これは世界各国で行われたのですけれども、まず一つ目は中国です。北京オリンピックに向けて何年も前から能力のある小さい子供たちを中国の全土から集めまして、小さいころからいろいろな強化をしていきました。スポーツの強豪国は皆さんも御存じのとおりアメリカで、メダル獲得数が断トツだったのですけれども、北京オリンピックのときにはついに中国がアメリカを抜いてトップに立ったと。それは、オリンピックで活躍する選手を育てていこうということでやっていったタレント発掘事業の影響ではないかと言われております。

あと、2番目のイギリスなのですけれども、こちらはこの前のロンドンオリンピックに向けて能力の高い人たちを集めてということで取り組んできて、ロンドンオリンピックで活躍をしたと言われております。イギリスでどういう内容で取り組まれたかというのをちょっと御紹介したいと思うのですけれども、ロンドンオリンピックに向けてスポーツジャイアントという事業に取り組みました。このスポーツジャイアントというのは、ジャイアントという名前ですので、体の大きい人を集めて、その人たちのいろいろな能力を高めて行ってオリンピック選手に育てようという事業です。何年も前からこれをやったのですけれども、この内容は男性であれば身長が190センチメートル以上の人、女性であれば身長が180センチメートル以上の人をイギリス全土から集めまして、その人たちをいろいろな競技団体が能力を見た上で、その人にどれが合うかというものを当てはめまして、その競技団体がその人たちを強化していくと。もともとそのスポーツをやっていたという人ではなくて、別な競技とか何もやっていない人たちが選ばれて競技に取り組み始めて、最終的にはロンドンオリンピックのときにこの事業で集められた人たちの中でオリンピック選手になった人が9名出ています。ボート競技で金メダルをとった女子の選手も出ております。ということで、世界各国でこういうタレント発掘事業というものが、先進国なのですけれども、行われております。トップアスリートを育てようということで行われている事業であります。2004年から日本でも事業に取り組み始めています。

岩手県で取り組んでいるのが、皆さん御存じのとおり、いわてスーパーキッズという事業になっております。この事業の今現在の内容をちょっとお話ししたいと思いますのですが、日本の国内でこのタレント発掘事業を統括しているところが日本スポーツ振興センターというところになっております。そこが統括してまして、全国で大体 15 箇所、15 地域ぐらいのところまで事業に取り組んでおりまして、最初に取り組み始めた福岡県では世界で活躍する選手が出始めてきております。

これはどういう内容かといいますと、こちらに書いてありますけれども、簡単に言いますと世界的に人気のある競技、人気のない競技などを分析し、分けをしておきます。あとは国によってですけれども、国際競技力の高い競技、低い競技、競技の普及率などもそれぞれで分析しております。また、国内での競技の競争率ですとか、その競技の五輪出場のための確率ですとか競技者の人口などをいろいろな方面から分析をしまして、ちょっと上のほうの括弧に書いてありますけれども、現状分析と可能性の把握、あとは戦略的な競技の選定などをいろいろな方向から研究をしまして、競技を決めていくという形をとっております。

日本の現状というところでちょっとお話ししたいと思いますけれども、その競技によってメダルを獲得するための問題点とか、問題点を生み出す要因などいろいろ分析をしまして、何に取り組んでいけばいいかというものを示して、先ほどお話しした全国から子供たちを集めて、どういう形で進めていくかということに取り組むわけです。

そういう中で、赤い字で書いてあるところ、ちょっと見づらいますが、これは、この前日本スポーツ振興センターで会議があり、その会議の資料に書いてあったのですが、小学校のスポーツ少年団などの活動から中学校の運動部活動への継続率は 81.7%で、中学校の運動部への入部のきっかけは、自分で決めていたというのが 71.9%になります。あと、三つ目なのですが、中学校で部活動を転部したことがない、変えたことがないという人が 93.3%ということになっていました。これは何が問題かといいますと、日本では一度始めたものというのは最後まで一生懸命頑張るなさいというのが昔からの美徳のような形にたたえられているわけですが、今世界を目指すためのスポーツ界での考え方というのは、もっともっと自分の可能性を見つけ出して、可能性のあるものにどんどん取り組んでいきなさい、変えていきなさいと言われております。ですので、変えることがいいということではないのですが、余りにもこういう状況であれば、子供たちの可能性がもっともっと広くできるものが狭まっているのではないかなという話もされておりました。あとは、特に田舎のほうでこれが問題になると思うのですが、人数が少ないので、部活動でやれるものが限られているという状況の中ではないから入って、それをずっとやっていかなければいけないという子供たちがいて、そういう点でも可能性が狭められているのではないかとと言われておりました。そういうものができるだけ少なくなるよということなので、こういう事業に日本でもどんどん取り組み始めているのが現状になっております。

続きまして、これが岩手県で取り組んでいる、いわてスーパーキッズの子供たちの主な成績になっております。御存じの方もいらっしゃると思うのですが、これが現学年になっております。性別と、あとはこの前種目というのが小学校、中学校までやってきた競技になります。そして、高校生は、中学校までこういう競技に取り組んできたけれども、いわてスーパーキッズの事業でほかのスポーツに出会って、ほかの競技をやりたいとなった子供たちが、ここにパスウェイと書いていますけれども、高校からこの競技に取り組み始めましたというものです。そして、これが平成23年度から平成25年度までの実績になっております。これは主な実績ですので、全国で少し活躍した人たちのものだけ出しておりますけれども、注目していただきたいのは実績までの期間、競技に取り組み始めてから成績を出すまでどれぐらいかかっていますかというところになります。

例えば2番目の高校3年生の女子ですけれども、中学校までバスケットをやってきました。高校からスピードスケートに取り組みたいというので取り組み始めました。そして、国体のスピードスケート少女500メートルで6位に入りました。この子が、スピードスケートに取り組み始めてから成績を出すまでどれぐらいかかっているのかというと、氷上トレーニングを始めて3箇月で結果を出していますよとなっています。ですので、子供たちというのは可能性が限りなくあると。その可能性を見つけ出すチャンスを与えるのが私たちの仕事かなと今強く感じております。

次にいきたいと思います。ちょっと話は変わるのですけれども、ここからはミキハウスのお話をさせていただきたいと思います。ぜひ皆さんも、岩手県が一つの会社とすればどうかというような感じでお考えいただきながら聞いていただければと思っております。

これはミキハウス所属でロンドンオリンピックのときに活躍した選手の写真になっております。先ほど出ていましたけれども、卓球の選手とか、あとはアーチェリーでもメダルをとっています。そのほか、マラソンとかスイミングとか、そういう競技にも出ております。大活躍をしたのですけれども、ミキハウスのスポーツクラブは、20年前のバルセロナのオリンピックのときからメダリストを輩出していました。皆さんも御存じのとおり、この写真にありますけれども、柔道で3連覇をしました野村忠宏選手もミキハウスの所属になっています。

ミキハウスは、ここに書いてありますけれども、いろいろな競技をやっているのですが、今では女子の卓球とかアーチェリーとか有名になりましたけれども、有名になる前から選手を所属させて強化をしてきたと言われております。今現在は、10種目の競技の24名がミキハウスのスポーツクラブに所属しているのだそうです。

そして、ミキハウスのスポーツクラブは結果の出やすい、そして可能性の高い競技に着目して力を入れてきたと言われております。ここに書いてありますが、マイナー競技は力があるのですけれども、いろいろな理由によってやめなければいけない状態になりやすいと。そういう人たちを活躍させて、マイナー競技をメジャー競技にさせたいということで

ミキハウスの社長さんはやっているそうです。

そして、こちらになりますけれども、その結果、いろいろなところに好影響があると言われております。一般社員は仲間が世界で活躍しているところを見て、いい刺激になって、私たちが頑張らなければいけないと思う。あと、社長さんが言っていましたけれども、選手を雇用する投資額というのは半端ではないと、ただしPR効果の薄いマイナー競技の選手をメダリストに育て上げた企業イメージは、お金では買えない価値が出てくると。スポーツが持つ影響力、あとは費用対効果が抜群なのだそうです。

私は、いつも子供たちにお話するときこれを言うのですけれども、夢は、普通は努力によりかなえられるといたしますけれども、私は事前準備によってかなえられると思います。

こちら、近代オリンピックの創始者、皆さんも御存じだと思いますけれども、ピエール・ド・クーベルタン男爵の言葉になります。オリンピックで重要なことは、勝つことではなく、参加することである。人生で大切なことは、成功することではなく、努力することである、と話しております。

こちらが国際オリンピック委員会のジャック・ロゲ前会長になります。ジャック・ロゲ前会長が言った言葉なのですけれども、試合に勝つにはゴールにいち早く到達するだけでいいが、真のチャンピオンになるためには体の鍛練だけではなく、人格も磨かなければならない、と話しております。

あと、同じくジャック・ロゲ前会長の、2010年のバンクーバーオリンピック開会式での選手諸君へのスピーチの一部なのですけれども、この大会の主役はあなたたち選手だ。あなた方のパフォーマンスと行動を通して世界の人々が希望を抱くことができるような大会にしよう。選手たちには世界の若者のお手本であることを自覚してほしい。責任のない栄光は存在しない、とお話をされていました。

ということで、ジャック・ロゲ前会長が発案したユースオリンピックというのが開催されております。御存じの方もいらっしゃると思うのですけれども、ユースオリンピックというのは、本当のオリンピックに将来参加するであろうという少し若い年代の14歳から18歳までのアスリートを対象に行われております。これは何を目的としているかといいますと、スポーツと文化、教育を統合したイベントと言われております。文化・教育プログラムへの参加を義務づけられております。試合もあるのでございますけれども、こういうプログラムに必ず参加をしなければいけない。その内容については、こちらに書いてありますが、オリンピックの価値、健康なライフスタイル、社会的な責任、異国の人々との交流、プロ意識。皆さんも御存じのとおり、オリンピックで勝てばいい、勝つためには何をしてもいいということで、ドーピングの問題ですとかいろいろな問題が出てきているのですけれども、今世界では、スポーツというものはそういうものではないのだよということを、若いうちからわかってもらわなければスポーツは滅びるだろうと言われておまして、子供たちからこういう勉強をしなければいけないということで、ジャック・ロゲ前会長が発案しまして、こういうイベントといたしますか、大会が行われています。

私が思うことなのですけれども、スポーツの魅力、力というのは、スポーツを通じての人間育成も大きな魅力だと感じており、スポーツは大きな力を持っていろんな影響を与えられるものだと思っています。

ということで、2年後のいわて国体がすぐ目の前に来ております。いわて国体に向けて選手強化委員会というものがあまして、私は委員をやらせていただいているのですけれども、2012年の6月に私が思っていた気持ちということで、選手強化委員会のときにお話させていただいた文章をちょっとここで読ませていただきたいと思いますので、お聞きいただきたいと思います。ちょうど震災があつて、一時、国体が開催できないという中で、何とかやっ払いこうと知事からお話があり、2012年の4月に正式にやろうというお話があまして、その後の2012年の6月に行われた選手強化委員会でお話したことです。

昨年12月にいわて国体の開催が決まり、半年が過ぎ、私が今感じていることを少しお話させていただきたいと思います。約50年に1回の国体地元開催のときに、今このときに自分が生きていること、この場にいられることにすごく運がいいなと思っています。前回のいわて国体のときは3歳でしたので、覚えておりません。次回のいわて国体は多分生きていないと思います。確率から考えますと、4年に1回のオリンピックよりも地元国体というこの場にいられることは奇跡的だなというふうに感じております。一生の中で、最初で最後のチャンスになると思います。この仕事に携わらせていただいて、本当に感謝しております。ましてや最前線の選手強化部門に携わらせていただけること、国体が成功するかどうかは私たち強化委員会のやり方次第だと身の引き締まる思いです。それほどすばらしい場に立たせていただくチャンスに燃えないわけにはいかない、熱くならないわけにはいかないと強く感じております。毎日わくわくしながら選手強化をどうすれば得点につながられるかと、競技団体にどうすれば本気になってもらえるかと、何かで悪い息子をどう指導していけば本気になってくれるかというような親心のように毎日考えております。ここにいらっしゃる選手強化委員会の皆さんも同じ思いだと思っています。地元国体開催の最前線の選手強化部門を担当する私たちが燃えなくて、競技団体、選手、そして県民を燃えさせることや国体開催の成功はあり得ないと思っています。済みませんが、私事になりますが、三ヶ田がやっていた、いわて国体の選手強化事業は大して良くなかったよなというふうには絶対言われたくないです。やるからには自分で納得いく仕事をぜひしたいと考えております。今、岩手県の状況や経済状態の中で、県民の皆さんの税金の中から出していただいている選手強化のお金です。しっかり費用対効果を見ながら最大限に効果が出る方法にお金を使わないと県民の皆さんがどう思うか、大変なことになってしまうと思います。責任重大だからこそ熱くなってしまうますが、この4年間、国体まで皆さんと一緒に熱く選手強化に取り組んで、いわて国体ではぜひ結果を勝ち取りたいと願っております。2012年6月20日に行われました八重樫東選手と井岡一翔選手のボクシングの試合、とてもすばらしかったです。同じ岩手県人として八重樫選手を誇りに思いました。試合前の八重樫選手のコメントに、やれる準備は全てやってきた、そう言い切れる自信、私自身

もそういうふう言い切って、いわて国体を迎えたいと思っております。4年後に皆さんとぜひ美酒を味わいたいです。どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。と、選手強化の委員会でお話をさせていただきました。

ここにありますとおり、もういわて国体まで2年となりました。2年まだあるのか、2年しかないのかですけれども、この2年間で悔いのないようにできることをしていきたいと思っております。

2020年の東京オリンピックの開催が決定いたしました。2020年に向けてスポーツを取り巻く環境というのはどんどん変わっていくだろうと感じております。皆さんも御存じのとおり、スポーツ庁発足の動きが本格化してきております。いずれスポーツ界には2020年までの間、追い風が吹くだろうと感じております。岩手県もその追い風や流れに置いていかれないようにしていかなければいけないなど、本当に強く感じております。個人的なお話をしますと、ぜひこれからは競技スポーツを担当する専門的な行政部門が必要ではないかと感じております。

1カ月後にはソチオリンピックが始まります。岩手県を代表しまして永井選手、苫米地選手が参加しますが、お二人を初めとして日本選手団の活躍をお祈りしながら、きょうの私の拙いお話、ちょっとわかりづらいうお話だったかもしれませんが、終わらせていただきたいと思ひます。大変、先生方の前で失礼なお話などあったかもしれませんが、お許しいただければと思っております。

最後になりますが、いつもお話をした後は金メダルを見ていただいています、きょうも持ってまいりましたので、見ていただければと思ひます。

金メダルをさわると宝くじが当たりますというふうには、それが、私がとった金メダルになります。周りが金になっていて、真ん中はクリスタルになっています。クリスタルには五輪のマークと、開催国がフランスでしたので、フランスの山並みが彫られています。当時、一緒にオリンピックでメダルをとられた選手が、今国会議員の橋本聖子さんや最近テレビにはちょっと出なくなりましたが、フィギュアスケートの伊藤みどり選手たちです。

金、銀、銅のメダルは、これも必ずお話しするのですが、銀と銅は人がさわって年がたつとさびてくるのです。金はさびなくて、金そのまま金色なので。橋本聖子さんとか伊藤みどり選手と、何かイベントがあつてメダルを持ち合つたときに見せてもらつて黒ずんでいて、やっぱり金メダルをとつてよかつたなと思っております。ぜひ岩手県からもどんどんこういうメダルをとれる選手が育つていけばいいなと思っております。ぜひ先生方からも御協力をいただきながら、そういう環境をつくつていければいいなと思っております。よろしくお願ひしたいと思ひます。きょうはどうもありがとうございました。

〔拍手〕

○城内愛彦委員長 大変貴重なお話をありがとうございました。

これより質疑、意見交換を行いたいと思ひます。ただいまお話しいただきましたことに関

して、質疑、意見がありましたらお伺いをしたいと思います。挙手で発言をお願いいたします。

○樋下正信委員 きょうはすばらしいお話をありがとうございます。私も大宮中学校の卒業生でございまして、PTA副会長をなさっているということで、本当に御苦労さまでございます。

あと、私は岩手県水泳連盟の会長をやっております、本当に水泳にかかわる方々、先生方も一生懸命選手を育てていただいているわけですが、いろいろな種目があるのですけれども、どの種目がどうのこうのということではないのですけれども、その指導者の先生方、例えば水泳に関しては学校の先生方も結構いらっしゃるのですけれども、その指導者に関して、岩手県のスポーツ界に関しては三ヶ田先生から見て充実しているのか、まだまだもっと指導者が必要なのか、どのような感触をお持ちなのかお聞かせ願えればと思います。

○三ヶ田礼一講師 私も岩手県体育協会ですら仕事をさせていただいておりますので、県内のいろいろな競技団体ごとの指導者の人数などを把握したりしているのですけれども、競技団体によりましては人数が少ない、指導者が少ないという競技もありますし、あとは今おっしゃられましたとおり先生方が多い競技団体というのもあります。多い競技団体で人的パワーもありながらも、本当は指導者の質というものが大事ではないかなと。

よく選手が最初なのか、指導者が最初なのかと言われますけれども、やはり私は指導者によい人がいなければ選手は育たないのではないかなと思っておりますので、こういう場でお話してよいのかどうかあれなのですけれども、先生になれる方というのは頭がよくなければ、学問のほうがよくなければ採用されないということがありますので、どちらかといいますとトップアスリートをやってきて、その世界をわかっている指導力がある人たちの中で先生になっている方というのは、ちょっと少ないのかなと感じるところもあります。先生になってから一生懸命勉強をされて、そういう能力を備えられている方もいらっしゃいますし、一概には言えないのですけれども、ぜひ選手としてもそういう経験をお持ちの方が指導されるチャンスが与えられる環境が、もっともっと岩手県にあれば、指導者が充実してきて、選手も育っていくチャンスがふえていくのではないかなと私個人としては時々感じておりました。

○佐々木博委員 きょうはどうもありがとうございました。私も岩手県スケート連盟の顧問をやっています、きのう冬季国体の開催が決まりました、ほっとしているところです。ただ問題は、屋内スケートリンクが足りなくて、これをどうやっていくかということで、まだまだやらなければいけない問題があると思っています。

私も特に中学生、高校生はやっぱり指導者の影響力がかなりあると思うのです。大学の場合ですと、ある程度自分たちでいろいろ工夫もしますし、いろいろやりますけれども、中学生、高校生というのはかなり指導者によって違うと思うのです。

それで、全国的に見ていまして、各競技でそれぞれ名門校と言われる強い学校があり

ますが、そういったところは指導者も変わらないで、ずっと同じ先生が指導しているところが多いです。公立高校では、例えば能代工業高等学校のバスケットボールなんかはずっと変わりませんし、あるいは秋田工業高等学校のラグビーだとか、そういったことが私は必要だと思うし、そういったスポーツが強いということもその学校の一つの大きな特色だと思うのです。

そこで、岩手県がどうかというと、少なくとも教員の異動の問題でいうと悪平等みたいで、せっかくいいレベルまで育てたのに先生がほかの学校に行ってしまうと、そしてまたポシャってしまうというのがかなりある。例えば身近な例で言うと盛岡第二高等学校のハンドボールの小友先生は、本当に食事まで一生懸命やっていたけれども、先生がいなくなってしまうとやっぱりだめになってしまった。あるいはラグビーなんかもそうですね。昔、黒沢尻工業高等学校のラグビーは非常に強かった。野田先生というすばらしい指導者がいて、その後、盛岡第一高等学校に来たわけですが、いくらやっても、あのレベルまではいきません。黒沢尻工業高等学校のラグビーも先生の異動で大分停滞したと私は思うのです。ですから、本当にスポーツに力を入れるためには、この競技が強いというのも学校の大きな特色ですから、教員が余り機械的に異動しないで、そこに定着してもらおうということが大切だと思います。

それから、今、盛岡市がスポーツ職員の特別選抜を始めているのですが、私は教員にもそれはすごく必要だと思います。私個人は剣道をやっていたのですが、母校の東奥義塾高等学校で塾長をされた笹森順造先生って御存じですか。早稲田大学の剣道部の大先輩で、早稲田大学で剣道をやっていたのですが、中学校で今武道も盛んですけれども、盛岡市内では、柔道は幾らかいますけれども、剣道を教えられる先生なんかほとんどいません。ですから、本当にきちっとやるためには、ある程度指導者を育てなければいけないし、それから非常に実績を上げているような先生は、本人が希望すれば別ですけれども、余り転勤させないで、そこに残って指導を続けていただくということが大切なのであって、どうも悪平等で機械的に転勤させるのはいかがかと思っているのですが、もし御意見を言って差し支えがないのであればお聞きしたいと思います。

○三ヶ田礼一講師 おっしゃられるとおり、やはり指導者の熱意によって強い、ダメになるというのがあるなと感じておりまして、私も指導する立場に携わらせていただいているのですけれども、本当に熱を上げて指導するとなると、家庭も置いておきながら、自分の時間を割いてでも熱中して指導する時間をつくらなければいけないということがありますので、本当にそこまでやれる方がいるのかどうか。例えば、よくスポーツ少年団とかであれば、親御さんたちも指導者に入ったりするわけですが、自分の子供がいますと家庭を置いてでも、子供のことになりますので一生懸命なのですが、子供がいなくなると家庭を置いてでもやるかといえば、やっぱりそれはなかなか難しくなるというのが人間ではないかなと思います。そういう熱意のある、家庭を置いてでもできるような気持ちを持てるような方がいらっしゃれば、岩手県もどんどん強くなっていくのではないかなと思っております。

す。

あとは、私はずっとスキーばかりやってきましたから、学問的には本当に、こうやって県の職員としての立場というのが申しわけないなというところなのですが、先ほどもお話ししましたけれども、スポーツというのは人間形成も入っていると思っております。

済みません、岩手県の話だけではないのですけれども、全国的にいろいろな不祥事とかがある中で、スポーツ界でもあるのですけれども、スポーツというのは先ほどお話ししましたジャック・ロゲ前会長が、人間形成が大事だということで、スポーツだけやっていたらよいということではなくて、そういう人間形成のほうにも随分力を入れています。いわてスーパーキッズでもやっており、社会に出るとうまく順応できるような、子供たちを指導できるような立場の人たちも多く出のではないかなと思っておりますので、学問は多少できなくても、学校の先生ですとか県で採用していただいて、ぜひ一生懸命やっていただく指導者の確保をお願いしたいなど、個人的には私も思っております。

○佐々木博委員 ありがとうございます。

○飯澤匡委員 佐々木博委員のお話で、最近ちょっと気づいているというか、地域にも提案しているのですが、私の選挙区は岩手県の南部で、女子の小学生のソフトボール部ですが、まず非常に熱意のある先生がいて、その先生の教え子がどんどん出てきて、学校教育の場でそこがうまく回転して、技術の講習会とか積極的に行ったりして、長い年月をかけて非常にレベルが上がったのです。

ところが、さっきの話ではないのですが、やっぱり学年によって非常に熱意のある父兄の方々があると、それだけにお金も投資しなければならないと。そうするとある程度強くなりますしモチベーションも高くなります。ところが、次の学年になるとそこまでやらなくてもよいのではないかという負の遺産が出てきてゼロとなってしまう、あと2年ぐらい置かないとまた次のレベルに追いついていかないといったような、波動的なレベルの差があって、さっき三ヶ田先生おっしゃったように、スポーツ少年団で一生懸命やったコーチ、親御さんなんかにも、自分の子供だけではなく、最低2年は続けなければだめだよとお話もしたのだけれども、自分のお子さんのときにだけということで結局それはできないのです。

これは財政的な問題もあるので、私は岩手県体育協会にも、全国大会に出場して地域の関心が高まったときに、スポーツ基金なりそういうものを集めて安定的な財政運営をして、その中で遠征費を捻出するような仕掛けでも提案だけでもしてみたらどうかと言ったのですが、これまたできないと。要は、ある程度成績が上がればよかったねとは言いつつも、スポーツというのがまだまだ地域社会の中では、継続的に続けていくのはあくまでもボランティアの段階でとどまってしまっているという非常に残念な形になっているのです。

あともう一つは、今学校関係の先生の話がありました、スポーツ少年団と学校との間でも監督責任だとか何とかという話もあって、これも非常に難しい場面も最近結構出てきています。だから、岩手県だけではなくて日本全国そうなのでしょうけれども、これはお

金との兼ね合いで大変難しいのだけれども、何かもう少し一歩進んだ段階でできやしないかと。ひとつ、国体を契機に何らかの形で地域の中で、例えば遠野市の場合はサッカーだとか、地域ごとにいろいろな特色のあるスポーツがあるのだから、その中でうまく育てるような工夫を何かしていかないと、もう数十年来一緒なのですよね。よい先生はスカウトして教育委員会に配置するけれども、それっきりののです。

ソフトボールで有名な世界的にも活躍した選手が来たりして、学校の先生はお互いに切磋琢磨するけれども、やっぱり選手を育成する環境だとか自分たちのできる限界というのはすぐ出てきます。こうしたいのだけれどもできないという時、行政との間には、相談する場面も対話をする機会もない。だから、何かあると何とかしてくださいとすぐ僕らに言ってきます。そういうのはお金がかかるので大変難しい問題で、一気に解決はしないのだけれども、うまく一つ一つ積み上げてできる方策はないものか。これは日本全体の課題でもあると思うのです。ヨーロッパではスポーツクラブを中心に、学校はそこには関与しないという体制ですから、その体制自体を崩していくというのも、なかなか難しい話でしょうから、その中でどういうふうにもうまくできるのか。その辺の関与の仕方がみんなよい意味で自由なのだけれども、総合的なレベルアップのやり方とすれば、その方向性が一致していないというのが現状ではないかと思うのです。これはやっぱりお金も絡む問題なので、非常に難しい問題ではあると思うのだけれども、何か突破口をつくっていかないと今までどおりの繰り返して終わってしまうのではないかと。

今回の国体にしても、いわてスーパーキッズという形で先験的にやった部分は、これは恐らくそれなりに成果は出ると思うのですが、ではその後どうするのだというような中長期的な仕掛け自体もなかなかまだ見えてこない状況であるので、そここのところを気づいたところから、今からやっつけていかないと東京オリンピックまでも一過性で済んでしまうというような、ある意味心配事なのですけれども、その辺について御所見があれば。私も常々そう思っているのですけれども、なかなか解決ができないというジレンマに陥りながら、いろいろ地域のスポーツにかかわっているという状況です。

○三ヶ田礼一講師 先生が今おっしゃられましたとおり、学校体育、学校部活動という、日本のそういうシステムが古くからありますので、なかなかそれから脱することは難しい。それから学校体育、学校部活動というのはどちらかといいますと教育ですので、落ちこぼれといいますか、みんなをうまく上げていこうという考え方ですので、誰か1人をトップアスリートに育てようという考え方ではないので、トップアスリートを育てるという中ではちょっとハードルがあるというのは私も現状で感じているところではあるのですけれども、そういう日本の古くからのシステムを変えるといいますか、私個人として考えるところでは、先ほどもちらっとお話しましたが、専門的な競技スポーツを担当する行政部門ができないと、教育でやっているのでは、保護者の方、全ての方へのいろんな説明とか、そういう教育では成り立たないところも競技スポーツにはあると思いますので、そういう点では、今度、国ではスポーツ庁というのができると思いますので、専門的な競技スポーツを

担当する行政というのが補っていくものが地域でも必要ではないかなと。

先ほどおっしゃられました、中学校までは、いわてスーパーキッズで把握していても、その後高等学校、大学、社会人まで教育委員会の事業で把握していけるものかという問題もある中で、専門的な競技スポーツを担当する行政ができると、全てのスポーツをやっている人たちを把握しながら強化していくという形がとれるのではないかと思いますので、いろいろな今までの日本の歴史の中で難しいところだと思いますけれども、何かそういう気持ちを私も感じております。

○吉田敬子委員 きょうはどうもありがとうございました。

お話の中で何点かお伺いしたいのですけれども、中学校で部活動を転部したことがない生徒が93.3%ということで、びっくりしたし、自分のときも思い出して確かにそうだなと。当時中学校のときに、私は部活ですね、きちんとやっていたのですけれども、例えば違うことをやりたくても、私だけではなくほかの生徒もそうだったのだけれども、なかなか違うのに変えるという雰囲気が全くなかったことと、あと最初に部活に入っていなくて、途中から入りたくても、やめたいとか逆に途中から入ったのでいじめになったりというのが、その当時結構あって、三ヶ田さんから見られて、そういった部活を転部したりだとか、もしくは途中から入れるような環境をつくっていくためにはどうしていったらいいのかということが一つ。

また、例えば先ほどいわてスーパーキッズの中で、バスケットとかバレーとか柔道をやっていて、いきなりスケートと自転車という子たちがいたので、スキーをやっていて、例えば同じようなスケートであればわかるのですけれども、周りの環境の影響もあると思いますが、どういった環境の中で選択しているのかということと、最後にいわてスーパーキッズの課題というか、三ヶ田さんが触れられているところなのだと思いますけれども、その三つ伺いたいと思います。

○三ヶ田礼一講師 一つ目ですけれども、一つ目何でしたっけ、部活動ですね。先ほどもちらっとお話しましたがけれども、日本の古くからの流れで、学校によってかもしれませんけれども、部活動を転部すると内申書が悪くなる、内申書に書かれるというところもこの前の日本スポーツ振興センターの会議で少し言われていたのですが、そういうことでなかなか変えることができていると。それで、可能性を狭めていつているのではないかという話、学校のシステムだと。やっぱり古くから日本は一度始めたものは最後までやるのが美德ですので、そういう問題があるのではないかとされていました。

○吉田敬子委員 例えば教育委員会で、何かこういう風に変えていったらよいみたいな話はあるのですか。

○三ヶ田礼一講師 なかなか難しい問題ではないかなと思うのですけれども、変える目的が、しっかりと自分の可能性を見つけ出して、よい方向に行くというのであればよいと思うのですけれども、先ほど言われたいじめですとかいろんな問題でやめなければいけないとか、そのパターンが判断しづらいというものもあるのではないかなと思います。学校

の仕組みと申しますか、そういうものが少し問題ではないかなというのがこの前の日本スポーツ振興センターの会議では出ていました。

あと、二つ目ですけれども、先ほど紹介いたしましたいわてスーパーキッズの子供たちなのですが、高校3年生で急に変わったというのではなくて、小学校6年生から中学校3年生まで、いわてスーパーキッズに所属している間にいろんなスポーツを体験するチャンスがありまして、その中で自分がやってみて、これはおもしろそうだな、やってよさそうだなという気持ちが出るのと、あとは体験するときはその競技団体の指導する方から、子供たち一人一人の可能性の評価をしてもらってまして、この子であれば可能性があるよとか、この子はこの競技をやってもちょっと無理そうだなとか、そういう評価を一人一人していただいている、それを子供たち、保護者の方にフィードバックして、高校以降に何に取り組んでいくかという選択をする上での参考資料を出しております。そういうものを含めて、さっき紹介しました子供たちは中学校を卒業して高校に上がる時点で競技を変えて、高校1年生から取り組み始めていて、今現在一番上の子供たちは高校3年生になっているのですけれども、この子供たちが実績を出しています。

あと、最後の質問ですけれども、いわてスーパーキッズの問題点はいろいろあり、いわてスーパーキッズと同じような考え方の事業があるのですけれども、ただこれも全ての子供たちに当てはまるかといえばそうでもない。ある程度結果を出せる子供たちもいますし、あとは違う形のほうがいい子もいるなという、そのすみ分けがなかなか難しいのかなと感じております。

○名須川晋委員 ありがとうございます。

先ほど専門的な部局、スポーツを強くするための組織が必要だとおっしゃられて、東京都ですとスポーツ振興局というのがありまして、私も議会のたびに言っておりますが、岩手県もさまざまなスポーツ行政に特化した、そういう部局が必要だと思っておりますが、そういう御認識のお話だったのかなという確認と、あと、希望郷いわて国体ではなく障害者スポーツ大会のほうですが、割とそちらのほうは参加することに意義があると思うのですけれども、パラリンピックの選手育成については、どうしても保健福祉分野になってしまって、携わることができないところだと思うのですが、やはり福祉の分野ではなくて、アスリートですから、これはスポーツ健康課で取り組むべきことだと思うのですけれども、その辺はスポーツに特化した部局ができれば具体化してできると思うのですが、その辺の御感想について。

あと、いわてスーパーキッズですが、2020年の東京大会ではパラリンピアンを岩手県が輩出できるように、後天的な障がいを持つ選手が多いと思うのですけれども、いわてスーパーキッズでそういう障がいを持っている子供を発掘、育成していくという観点も必要で、今やっているのかどうかわかりませんが、もしやっていたら6年後のパラリンピックに向けて非常に我々も期待が持てるのではないかなと思うのですが、いかがでしょう。

○三ヶ田礼一講師 行政部門なのですけれども、国としてもパラリンピックの所管部門が文部科学省に移ってきているようですし、そういう点では国に見習って、県としても動き始めたほうが、やはり連携をとるには動きやすいのではないかなと個人的には思っております。

あと、個人的にですが、行政部門でそういう専門的なものというのは、おっしゃられましたとおりそういう部門があれば本当によいのではないかなと感じております。

あと、パラリンピックのほうですけれども、ことし、ソチのパラリンピックに岩手県から2人選ばれているのですが、この中の1人、山田町出身で盛岡南高等学校の女の子が歩くスキー、クロスカントリーの種目で選ばれております。そういう子たちもいますので、現在、いわてスーパーキッズとしましては、そういう障がいを持った子供たちに対し何かするということではできてはいないのですけれども、いわてスーパーキッズの中で知識プログラムというものがあまして、その中でオリンピックなどに詳しい先生に来ていただいて、こういう子供たちもこういうふうに頑張っているのだよという紹介をしていただいて、見てどう思いますかという、そういうプログラムもやっておりますので、もしチャンスがあれば、人的パワーとかの問題点はまだまだありますけれども、御協力いただけるものであれば県として全体的にレベルアップをしていければよいなと感じております。

○城内愛彦委員長 ほかにありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○城内愛彦委員長 ほかにないようなので、本日の調査はこれをもって終了したいと思います。

本当にきょうはありがとうございました。先生のお話を聞いて、国体までまだ2年あるのだというふうに思いました。我々ができる力を持って、できればやはり国体は優勝を目指すべきだと私も思っています。三ヶ田様、本日はお忙しいところ大変ありがとうございました。

〔拍手〕

○城内愛彦委員長 委員の皆様には次回の委員会運営について御相談がありますので、しばしお残りをいただきたいと思えます。

次に、4月に予定されております次回の当委員会の調査事項についてであります、御意見等はありませんでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○城内愛彦委員長 特に御意見がなければ当職に一任を願いたいと思えますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○城内愛彦委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。大変ありがとうございました。